

コラム

通夜・葬儀のころ

～「死」と共にある「いのち」～

死別は辛く悲しいことです。しかし、その悲しみの中でいのちの事実を知らされます。生きるということは、たくさんの人との死別であり、そして私もいつか死にゆくいのちを生きているのです。

さらに、限られたいのちだからこそ、一人ひとりの存在の尊さや重さを改めて感じ、同時に生に執着し、死を恐れる私の姿も教えられます。

悲しみを通して、確かな人生を歩んでいくことが、亡き人から願われているのです。



▲1950年代のとある葬儀の風景。野辺送りといわれる葬送の列の後ろに棺を担いでいるのが見える。

表紙イラスト「お仏供(お仏飯)」

…ご飯を「仏器」に盛ってお備えします。



今月の門徒さん

「飽食の今」

松島 淳子さん (長崎組 妙行寺)

秋と聞くとさわやかな秋空を見上げた時の、もの悲しさ、寂しさを思い浮かべます。日本人は一人一日当たり、お茶碗一杯分の食物を廃棄しているそうです。食べることに苦勞の多かった時代を生きられた親鸞聖人は、飽食の今に何を思われるでしょう。

私は普段から食べ物を無駄にしないよう心掛けていますが、日々の忙しさでお仏供や食前・食後のことばを疎かにし、いのちをいただいていることを忘れて過ごしている自分もいます。

聞法をしているとそういった在り方に気づかされるので、私にとっての大事な時間です。これからも様々な先生のお話をお聞きしながら歩んでいきたいです。



松島さんのように、見えにくい「いのちの支え」に悲しめる人でありたいですね。普段の生活を見直す時間をも大切にしたいです。

10

月号

いのちをいただく

食べることと生きること

kyushu-kyoku

九州教区

発行：真宗大谷派 九州教区教化委員会

〒830-0038 福岡県久留米市西町 540-1 TEL.0942-32-3056





いのちを いただく

実りの秋に想う

秋は実りの多い季節です。「秋」という字は、一説には穀物などの収穫が「飽き満ちる」からきていると言われています。中でもお米は食事の中心で、私たちのいのちを支えてきました。中世にはお米の生産力を「石高」という単位で表し、財力の指標にするなど、お米は私たちと密接に関わってきました。

古くから日本では稲作を中心とした農業が営まれ、子どもたちも手伝い、地域の人々が助けあって田植えや稲刈りをしました。なにぶん自然が相手のことなので、どれだけ人間が手を尽くしても不作の時もあります。だからこそ実ったときによろこびは、ひとしおだったことでしょう。

食前・食後のことば

先人たちは大事なお米を、まづご本尊にお備えしました。お内仏のお給仕として、お仏供(お仏飯)は、朝、お勤めの後にお備えし、お昼にはお控えします。そして、お控えしたお仏供は無駄にせず、美味しくいただきます。しよう。

真宗大谷派では食事の際に合掌して、唱和する「食前・食後のことば」があります。食べることも「仏事」であると考えられています。

「食後のことば」
われ今この浄き食を終わりて
心ゆたかに 力身にみつ
ごちそうさま



「食前のごとば」

み光のもとわれ今さいわいに
この浄き食をつく
いただきます



「浄き食」という言葉には、「いのちをいただく」ことよって「いのちをつなぐ」という意味が込められています。この私のいのちは、他のいのちをいただくことで支えられているのです。

はたらきをいただく

本願寺八代の蓮如上人は、「食事の際は合掌して、如来・親鸞聖人の御用(おはたらき)としていただく」(現代語訳)とおっしゃられています。阿弥陀



仏や親鸞聖人は、「私たちは他のいのちをいただきながら生きる存在である」ということを問いかけておられるのではないのでしょうか。もちろん食べることだけでなく、着る服も、住む場所も他のいのちをいただくことで私たちの生活は成り立っています。しかし、普段私

たちはそのことを顧みずに、当たり前に感じてはいないのでしょうか。本当は多くのいのちが自分という存在にはたらいているのです。
お勤めの空気を吸い込んだお仏供をいただく。そのことが、あらためて食事の意義を問い直し、ご本尊を中心とした一日を過ごす機縁となるでしょう。